第35回夏期福音特別集会（２）

霊光なるキリスト――ヨハネ伝第９章

１９８８年８月20日
小池辰雄

最後の峠　神の栄光の現れんため　世の光　恵みの事実　彼は預言者なり　汝と語る者はそれなり　心の目が開いた　十字架と聖霊の光　弔い合戦　わがうちなるキリスト　キリストの変貌　キリストの光で読む　詩「盲人の証言」　著作集第十巻 12月3日「自由の霊」　著作集第十巻 11月25日「神より出で神に帰る」

【ヨハネ9・1～41】

1イエス途往くとき、生れながらの盲人（めしい）を見給いたれば、2弟子たち問いて言う『ラビ、この人の盲人にて生れしは、誰の罪によるぞ、己のか、親のか』3イエス答え給う『この人の罪にも親の罪にもあらず、ただ彼の上に神の業の顕れん為なり。4我を遣（つかわ）し給いし者の業を我ら昼の間になさざる可からず。夜きたらん、その時は誰も働くこと能わず。5われ世におる間世の光なり』6かく言いて地に唾（つばき）し、唾にて泥をつくり、之を盲人の目にぬりて言い給う、7『ゆきてシロアム（称けば遣されたる者）の池にて洗え』乃（すなわ）ちゆきて洗いたれば、見ゆることを得て帰れり。8ここに隣人および前に彼の乞食なるを見し者ども言う『この人は坐して物乞いいたるにあらずや』9或人は『夫（それ）なり』といい、或人は『否、ただ似たるなり』という。かの者『われは夫なり』と言いたれば、10人々いう『さらば汝の目は如何にして開きたるか』11答う『イエスという人、泥をつくり我が目に塗りて言う「シロアムに往きて洗え」と、乃ち往て洗いたれば、物見ることを得たり』12彼ら『その人は何処に居るか』と言えば『知らず』と答う。

13人々さきに盲目なりし者をパリサイ人らの許に連れきたる。14イエスの泥をつくりて其の人の目をあけし日は安息日なりき。15パリサイ人らも亦いかにして物見ることを得しかと問いたれば、彼いう『かの人わが目に泥をぬり、我これを洗いて見ゆることを得たり』16パリサイ人の中なる或人は『かの人、安息日を守らぬ故に、神より出でし者にあらず』と言い、或人は『罪ある人いかで斯る徴をなし得んや』と言いて互に相争いたり。17爰（ここ）にまた盲目なりし人に言う『なんじの目をあけしに因り、汝は彼に就きて如何にいうか』彼いう『預言者なり』18ユダヤ人ら彼が盲人なりしに見ゆるようになりしこと

を未だ信ぜずして、目の開きたる人の両親(ふたおや)を呼び、19問いて言う『これは盲目にて生れしと言う汝らの子なりや、然らば今いかにして見ゆるか』20両親こたえて言う『かれの我が子なることと盲目にて生れたる事とを知る。21されど今いかにして見ゆるかを知らず、又その目をあけしは誰なるか、我らは知らず、彼に問え、年長(た)けたれば自ら己がことを語らん』22両親のかく言いしは、ユダヤ人を懼れたるなり。ユダヤ人ら相議(はか)りて『若(も)しイエスをキリストと言い顕す者あらば、除名すべし』と定めたるに因る。23両親の『かれ年長けたれば彼に問え』と云えるは、此の故なり。24かれら盲目なりし人を再び呼びて言う『神に栄光を帰せよ、我等はかの人の罪人(つみびと)たるを知る』25答う『かれ罪人なるか、我は知らず、ただ一つの事を知る、即ち我さきに盲目たりしが、今見ゆることを得たる是なり』26彼ら言う『かれは汝に何をなししか、如何にして目をあけしか』27答う『われ既に汝らに告げたれど聴かざりき。何ぞまた聴かんとするか、汝らもその弟子とならんことを望むか』28かれら罵(ののし)りて言う『なんじは其の弟子なり、我等はモーセの弟子なり。29モーセに神の語り給いしことを知れど、此の人の何処よりかを知らず』30答えて言う『その何処よりかを知らずとは怪しき事なり、彼わが目をあけしに。31神は罪人に聴き給わねど、敬虔にして御意をおこなう人に聴き給うことを我らは知る。32世の太初(はじめ)より、盲目にて生れし者の目をあけし人あるを聞きし事なし。33かの人もし神より出でずば、何事をも為し得ざらん』34かれら答えて『なんじ全く罪のうちに生れながら、我らを教うるか』と言いて、遂に彼を追い出せり。

35イエスその追い出されしことを聞き、彼に逢いて言い給う『なんじ人の子を信ずるか』36答えて言う『主よ、それは誰なるか、われ信ぜまほし』37イエス言い給う『なんじ彼を見たり、汝と語る者はそれなり』38爰(ここ)に、かれ『主よ、我は信ず』といいて拝せり。39イエス言い給う『われ審判(さばき)の為にこの世に来れり。見えぬ人は見え、見ゆる人は盲目とならん為なり』40パリサイ人の中イエスと共に居りし者、これを聞きて言う『我らも盲目なるか』41イエス言い給う『もし盲目なりしならば、罪なかりしならん、然れど見ゆと言う汝らの罪は遺れり』

●最後の峠

イザヤ書35章は、私は旧約で一番好きなところです。今日のヨハネ伝9章とも関わりを持った大事なところです。今度は夏の特別集会も35回、イザヤ書が35章、不思議な数字の一致だなと思った。それから、35をひっくり返すと53。イザヤ書の53章と35章は、これは十字架と聖霊です。53章の土台があっての35章です。35章はキリストの地上のご生涯の預

言そのものです。キリストはたいへんな方です。私はもちろんお釈迦さんも無条件に尊敬しますけれども、イエス・キリストは桁違いです。

「言葉に表現することができない」

とパウロが言いましたが、私たち「クリスチアノス」、キリスト者はもぅたまらんですね、正直。

しかも、私は人生の最後の、心と身体、全存在の最後の峠を乗り切った。本当の無の世界に入った。キリストが輝いてくださるだけです。何の悩みもない。何の疑いもない。八四歳になって、やっとそんなところに着いた。しょうがない者です。しかし、ここまで来るには、主さまの永い、私の知らない深いお導きがあった。

●神の栄光の現れんため

今日は、ヨハネ伝第９章という少し珍しいところをお話します。これは長い。もちろん始めから終わりまで解説するわけではありません。ここに目の見えない方が一人いらっしゃる。そういう方を前にして、私はここを語りにくい。けれども、キリストがおっしゃっている通り、Aさんはもう魂の目が開いている方だから、心配しないでお話します。

[1]イエス途往くとき、生れながらの盲人(めしい)を見給いたれば、[2]弟子たち問いて言う『ラビ、この人の盲人にて生れしは、誰の罪によるぞ、己のか、親のか』

キリストは最初にご覧になった。弟子たちが、

「先生、この人の盲目に生まれたのは誰の罪ですか、自分のですか、親のですか」

と聞いた。ユダヤ人は、災いは何か罪の結果だとすぐ思う。それは、ある意味においては、正しい角度を持っていますけれども、災いはただ罪の結果ではない。

「災いも幸いも、神さまは自由になさる」

と、ヨブ記にあるとおりです。

[3]イエス答え給う『この人の罪にも親の罪にもあらず、ただ彼の上に神の業の顕れん為なり。

アダム、イブから罪はずうっと来ている。けれども、キリストはそんな「原罪」という言葉までもおっしゃらない。神学者ではないですから。

「ただ神さまの栄光の現れるため」

と。もうひとつ別に言うと、

「原因は何だっていいんだぞ」

ということです。因って来たるところを、何だかんだと詮索するのが人間だ。

「何だっていいよ。大事なことは、神さまの栄光を見ることだ。過去を見ることではない。現在から未来にわたって目を開け」

と。そういう気持がキリストの聖言の中にあると思います。

「親の罪だって、子の罪だっていいではないか」
と、もうひとつ言い変えればそういうことです。

3イエス答え給う『この人の罪にも親の罪にもあらず、ただ彼の上に神の業の顕れん為なり。

この聖言は素晴らしい。
「ただ彼の上に、ただ私の上に、ただあなた方一人の上に、神の栄光の現れんため
なり」
です。聖霊は、いろんな事にでっくわせばでっくわすほど、逆に力を与え給う。本当です、これは。全世界が寄ってたかって何と言おうが、必ず御霊が勝たしめ給う。それだけの力をキリストはくださる。

●世の光

4我を遣し給いし者の業を我ら昼の間になさざる可からず。夜きたらん、その時は誰も働くこと能わず。

「光のうちを」と。今日は、『霊光なるキリスト』という題です。「何々なるキリスト」ということで、「キリストの何々」という部分的なことではない。それ自身が霊光そのものであるキリストということです。言霊そのものであり給うキリストということ。
天地創造の時に最初に発した神さまの言葉は
「光あれ」
であった。私たちの目には光はない。太陽の光によって、我々は見ることができる。キリストの光でものが見える。それでなければ、絶対に見えない。我々の目は発光体ではない。私たちの目を――水晶体は曇っていない、もし曇っていれば――これを澄んだ無色透明なものにしてくださったのが、キリストの十字架である。キリストの十字架が、私たちを、霊眼を、生まれつきの目を、無色透明にしてくださって、「さぁ見ろ」と言って光を与えたから、本当にすべてが見えて来た。そうすると、何を読んでも、何を見ても、そこから、隠れた光が見えて来るし、曇っていれば、それを光に変えてしまうことが、変質させることができる。なんと素晴らしいことだなぁと思う。キリストはよく
「我を遣し給いし者
とおっしゃる。
「私の言葉も、私の業も、みな我を遣わし給いし者によるのだ」
と。キリストという方は、イエスという方はまったく無者なんです。老子が
「無為の為」
ということを言ったが、本当の「無為の為」をした者はイエス・キリストです。為ること無き者の本当の業。業なき業という。言なき言。ここにも書いてある、

「我を遣わしたまいし者の業を」

と。

5 **われ世におる間は世の光なり』**

「暗き世界に私が居るあいだは光である。向こう側へ行ってしまうと、ダメだよ」と。「世」というのはヨハネ伝では罪の世という意味です。

「汝らは世の光なり」

と言われた。なかなか光になろうとしても成れない。懐中電灯ではどうにもならない。

「私がお前の中に入って光となるぞ」

ということです。キリストは説明的なことはおっしゃらない。「汝らは世の光なり」と、断定的なんだ。聖霊が来るまでは、「汝らは世の光なり」なんておっしゃったって、ダメなことは、キリストはちゃんと知ってらっしゃるけれども、

「今に、私の言ったことが全部飲み込めるぞ」

と。ヨハネ書簡の中に書いてある通り、

「つらつら目にて見、耳にて聞き、手にて触りし、神の言」

とある。これはキリストのことです。

●恵みの事実

6 **かく言いて地に唾（つばき）し、唾にて泥をつくり、之を盲人の目にぬりて言い給う、**

7 **『ゆきてシロアム**（称けば遣されたる者）**の池にて洗え』乃（すなわ）ちゆきて洗いたれば、見ゆることを得て帰れり。**

と、実に簡単に書いてある。唾して泥を塗った。キリストの唾の中には、光を与えるところの力が入っている。シロアムの池というのは、いろんな特効的な池だものだから、お前も行って洗えと。生まれつきの――うまれつきだから何も知らなかったからね――それが見えてしまったんだから、まぁ大変だ。

8 **ここに隣人および前に彼の乞食なるを見し者ども言う『この人は坐して物乞いいたるにあらずや』……**

「そうだ。いや、そうではない、似ているけれどもそうではない」と、なんとかかんとか言っている。彼は、

「我はそれなり」

と言った。「その通りだ」と。「どうして、お前、目が開いたか」と聞いた。

「イエスとかいう人が、泥をつくって、自分の目に塗って、シロアムに行って洗えと言ったので、そのようにしたら、見えるようになりました」

と、事実をありのままに言っただけのはなし。一番強いのは事実です。

私たちの信仰は、「わからないから、まぁ、信じておきましょう」なんて、そんなのでは

ない。みんな事実です。事実に基づいている。恵みの事実です。自分でやったことではなくて、与えられたもの、させられたもの、在らしめられているところの現実です。誰がなんと言おうと、みんなこれが事実なんです。いわゆる、自分の主観的な信念だったら、ぐらつきます。そんなものではない。知らない人はいろいろ説明を聞く、どうなんだ、こうなんだと。説明をいくらしたってダメだ。キリストの、

「聞く耳ある者は聞くべし、見る目ある者は見るべし」

と言うわけです。

「事実を体験するまではどうにもならない世界だ。体験したら本ものになるぞ」

ということ。それまでは、多少観念であってもいいですよ。しかし、それから抜け出して来ないと。

「知識の増すところにいよいよ憂いが増す」

なんて、「伝道の書」に書いてあるけれども、今はもうとにかくいろいろ、意識過剰、心配過剰、情報過剰だ。この世の中、本当にしょうがない。機械にひっぱり回されてしまって。災いなるかなこの文明ということだ。全く行き過ぎた。

それで、なんのかんのと言って、パリサイ人の所へ持ってきた。

13 **人々さきに盲目なりし者をパリサイ人らの許に連れきたる。**

パリサイ人というのは、何言い出すかというと、「目が開いた時は安息日だ」と。パリサイ人が考えそうなことです。キリストのことを「安息日にすまじきことをした。怪しからん奴だ」と、こういうわけだ。「また、パリサイ人らいかにして物見ることを得しかと問うた」云々と。また、同じことを答えた。

●彼は預言者なり

16 **パリサイ人の中なる或人は『かの人、安息日を守らぬ故に、神より出でし者にあらず』と言い、或人は『罪ある人いかで斯る徴をなし得んや』と言いて互に相争いたり。**17 **爰(ここ)にまた盲目なりし人に言う『なんじの目をあけしに因り、汝は彼に就きて如何にいうか』彼いう『預言者なり』**

「キリストは神から来た者ではない」「いやそうでない」と、みなここで争った。「汝は彼についてどう思うか」と。「預言者だ、あれは」と答えた。

ユダヤ人ら彼が盲人なりしに見ゆるやうになりしことを未だ信ぜずして、目の開きたる人の両親(ふたおや)を呼び、……

今度は、親に聞いた。「これは盲人で生まれたか。お前たちの子か、今どうして見えるようになったか」なんて言って。

20 **両親(ふたおや)こたえて言う『かれの我が子なることと盲目にて生れたる事とを知る。**21 **されど今いかにして見ゆるかを知らず、又その目をあけしは誰なるか、我**

らは知らず、彼に問え、年長けたれば自ら己がことを語らん』

「我が子であることと盲人で生まれた事はその通りだ。でも、今どうして見えるようになったか、開けたのは誰か、私たちは知らない。彼に聞いてください。もう年とっているから答えるでしょう」

と答えた。ということは、もし、これを言おうものならば、ユダヤ教から除名される。「安息日にこういう事になったことを、お前達は肯定するならば、ユダヤ教徒ではない」と言って。両親はそれを恐れて、パリサイ人の前に、そういう答えをしたわけです。

律法というものは困ったものだ。律法というものは使う人が、良い人ならば、律法を善用するけれども、悪い奴だと同じ律法を悪用する。本当に律法を使えるのは、やっぱり福音を知っている人です。パリサイ精神のはダメなんだ。

25答う『かれ罪人なるか、我は知らず、ただ一つの事を知る、即ち我さきに盲目たりしが、今見ゆることを得たる是なり』

この25節が大事です。

「議論はいくらでもしてくれ。彼はどういう人だか知らん。パリサイ人がいうように罪人かなんか知らん。けれども、とにかく私は見えるようになった」

と、事実をありのままに告白している。キリストの恵みの事実を。「どうして見えるようになったか」と、また、こんなうるさいこと言って、聞いた。「また、なぜ聞くんだ」と。

28かれら罵りて言う『なんじは其の弟子なり、我等はモーセの弟子なり。29モーセに神の語り給いしことを知れど、此の人の何処よりかを知らず』

今度はののしった。「モーセとその流れだけが権威があって、キリストなんてものはモーセの律法に反する奴だ」と、こう思っているわけだ。実際、表向きは、いわゆる律法をキリストは破ってますから。

「安息日も主たるなり」

とキリストは言われたから。モーセよりはるかに上の人なんです。

「我はアブラハムよりも

もちろんモーセよりも

先にありしものなり」

と。

30答えて言う『その何処よりかを知らずとは怪しき事なり、彼わが目をあけしに。31神は罪人に聴き給わねど、敬虔にして御意をおこなう人に聴き給うことを我らは知る。

と、今度は答えてきた。

32世の太初より、盲目にて生れし者の目をあけし人あるを聞きし事なし。

今度はもう、はっきりしてきた。

33**かの人もし神より出でずば、何事をも為し得ざらん』**

これは福音の勝利の言葉です。「そんな者は今までいたか。いるなら、モーセの律法の中にいる者の、そんな事をしたのを聞かせもらいたい」というわけだ。

34**かれら答えて『なんじ全く罪のうちに生れながら、我らを教うるか』と言いて、遂に彼を追い出せり。**

いよいよもってパリサイ人は霊盲だ。とうとう追い出してしまった。

●汝と語る者はそれなり

35**イエスその追い出されしことを聞き、彼に逢いて言い給う『なんじ人の子を信ずるか』**

「人の子」とはもちろんキリストのこと。メシヤのことを隠れた言葉で人の子と言う。ダニエル書に書いてある。救い主です。

36**答えて言う『主よ、それは誰なるか、われ信ぜまほし』**

知りたいものですが、それは誰でしょうか。人の子なんて、まだこの盲人には分からないから。

37**イエス言い給う『なんじ彼を見たり、汝と語る者はそれなり』**

「お前と話している者がそのひと、私だよ」と。そこで、やっと盲人の魂の目も開けて、「主よ」と言い出したんだ、今度は。

38**爰(ここ)に、かれ『主よ、我は信ず』といいて拝せり。**

盲人の肉眼が開けてもまだ霊の眼が開けなかったのが、この問答で霊の眼が開けてきた。

39**イエス言い給う『われ審判(さばき)の為にこの世に来れり。見えぬ人は見え、見ゆる人は盲目とならん為なり』**

逆転です。

パウロは、サウロの時に、ギリシヤの思想もいろいろ得ている。大いに目が見えると思っていたところが、とんでもない、キリストにひっくり返されてからは、

「いわゆるこの世の哲学に迷わされるな」

なんてことを彼は言い出した。

「今までのものは塵あくたのごとく思う」

とまで言った。しかし、パウロは、神さまから賜ったいろいろな才能資質、それは自分中心であったものが、今度は神中心、キリスト中心に展開が始まった。決してただ捨てたのではない。今度は神さまに善用されてくる。

「われ審判の為にこの世に来たれり」

と全然反対のことを仰った。別なところに、

「我は世を救わんために来たので、審判(さばき)の為に来たのではない」

というキリストの言葉があります。その時その時に、その瞬間に大事な事をおっしやるだけです。本当のキリストの審判は必ず恵みに関わってくる。

「憐れみは審判に勝ち誇る」

という言葉がある通り。そうしたら今度は、

40パリサイ人の中イエスと共に居りし者、これを聞きて言う『我らも盲目なるか』41イエス言い給う『もし盲目なりしならば、罪なかりしならん、然れど見ゆと言う汝らの罪は遺(のこ)れり』

「もし、ちゃんと盲人ということが分かっていたならば罪はなかったのに、目が開けてると思ったもんだから、それが逆に罪だよ。見えると言う汝らの罪は、このままだと遺ってしまうぞ」

と。「間違っていました」と、その時にパリサイ人が本当にキリストに平伏せば、ひっくり返って救われるのに。魂の世界は物理の世界と違うから、「はい」と言おうが、「否(いな)」と言おうが、それはご自由です。「否」と言う人はサタンに捕らわれる。「参りました」と言って「はい」と言う人はキリストに捕らえられる。

これが第９章のあらましです。

●心の目が開いた

「目なくして見、耳なくして聞き、舌なくして語り、五感で認め得ないものを知る」

これは、神秘家の言葉です。そういう世界に私たちは入れられる。

もう少し、旧約のところを引きましょう。創世記21章19節。17節から読みますと、

「神その童子(わらべ)（イシマエル）の声を聞きたもう。神の使い即ち天よりハガルを呼びて之に言いけるはハガルよ何事ぞや、懼(おそ)るるなかれ、神かしこにおる童子の声を聞きたまえり、たちて童子を起こし之を汝の手に抱くべし、我之を大いなる国となさんと。神ハガルの目を開きたまいければ水の井(いど)あるを見、ゆきて革嚢(かわぶくろ)に水を充たし童子に飲ましめたり。神童子とともにいます。彼ついに成長(ひととな)り曠野(あらの)に居りて射者となり…」（創世記21・17～20）

水がなくなってしまった。ハガルが天使から目を開けられた。この「目を開きたまい」は、もちろん、ハガルは盲人ではなかった。魂の目が、心の目が開いた。それで、水のある所が示されて、この童が助かったわけです。神の憐れみがハガルに臨んだ。

「汝何事を為すにも神汝とともに在(いま)す。」（創世記21・22）

という言葉がその次に出ています。

それから、何といっても、一番はっきりした例はいうまでもなくパウロです。使徒行伝の９章だ。これは９章、22章、26章の三か所に出ています。

「サウロ地より起きて目をあけたれども何も見えざれば、人その手をひきてダ

マスコに導きゆきしに、三日のあいだ飲食せざりき。」（使徒行伝9・8～9）

三日間、見えない。飲み食いもしなかった。アナニヤが彼の上に按手した。

「アナニヤ……彼の上に手をおきて言う『兄弟サウロよ……なんじが再び見ることを得、かつ聖霊にて満たされん為なり』。直ちに彼の目より鱗（うろこ）のごときもの落ちて見ることを得、すなわち起きてバプテスマを受け、かつ食事して力づきたり。」（使徒行伝9・17…19）

「わが目より鱗のごときもの落ちたり」

と。これが、パウロの肉眼の開かれたことと同時に、魂の開眼をした。この魂の開眼をさせられてはじめて、キリストの光が見えた。

旧約の律法ではベールが掛かっていて光が見えない。預言者たちはかなり光を見ていたけれども、まだだった。みなキリストという光を指して、ものを言っていた。ミカ書には、

「暗黒の中を歩いても大丈夫だ。それはエホバの光による」

というようなことを書いてある所もありますけれども。詩篇の中にも、

「聖言はわが足のともしびである」

というような言葉もあります。

●十字架と聖霊の光

パウロはキリストの光を見たけれども、まだそれでいいというところにはいかなかった。我々の救いには、いろいろな段階がある。段階はその人によっていろいろです。どうでなければならない、ということは一つもない。

パウロは、まず光が見えた。それから今度は瞑想していたら、何が見えたかというと、この十字架なんです。まず聖霊の光でもってぶっ倒された。それから、この十字架が見えてきた。

「もう、十字架の他は何も語るまじと思う」

とコリント書簡に書いてある。

「それくらいに自分はキリストに贖われた。あのイザヤ書53章がそれであった。我らの罪とがのために彼は砕かれた。それによって我らに平安がきた」

と。イザヤ書53章を身をもって受けとられたのがキリスト自身です。

「これは私への預言である」

と。ゲッセマネの祈りでもって、これをキリストは本当に受けとられた。

「我はそれなり」

と言われた。ローマの兵隊がたじたじと退いた。捕らえられたけれども、キリストは自ら十字架に架かった。いきなり天界に行こうと思えば行かれた。

私たちに本当にイザヤ書53章、35章を身をもって証してくださったのがイエス・キリストです。あなた方、イザヤ書の53章と35章は暗記するくらいに読んでください。キリスト

をかくまで預言したものは他にありません。

それからロマ書の８章が光っている。７章は苦しみの章だ。もう、私はそこを突破をしたから、皆さんと最後の集会ができたんです。完全に乗り越えた、乗り越えさせられた。誰が何と言おうと。

この生まれつきの盲人は目が開いた。私たちも生まれつきの盲人である。それがこのキリストの十字架と復活と聖霊をもって目が開けられた。パリサイ人と逆になった。有り難うございます。

●弔い合戦

私ごとで申しわけないけれども、私にとっては、小池政美が北京で公使館の官吏をしていましたけれども、二七歳で腸チフスで仆れた。仆れる少し前にキリストが現れた。

「お母さん、イエスさまがお迎えにいらっしゃったので、私はお先に失礼します。申しわけありません」

と。１９２１年の９月22日です。

母は本当に独りで苦労した。父は早く私の五つの時に亡くなりましたから、我々５、６人の子どもたちを独りで育ててくれた。本当に苦労した。パンにバターを付けることができなかった。お砂糖を付けて食べた。友達はみんなランドセルを買うけど、私はランドセルを買ってもらえなかった。それくらい貧乏しながら、しかし、私たちに最高の教育の府を通らせてくれた。

兄貴は秀才中の秀才です、本当に凄かった。高等文官試験の試験官がその成績でびっくりしたそうです。せっかくでき上がったこの兄貴が27歳で仆れた。柱となる人だった。母は今までの苦労と突然の心痛で、帰りの黄海の上で船の中で失明した。失明した母が遺骨を抱えて帰って来られた。私はどうにもならなかった。人生のどん底に叩きつけられた。眠るに眠られず、泣くに泣かれず。

この母に福音を伝える義務を私は感じて、それで私が救われてからお母さんのために家庭集会を始めた。この武蔵野の集会はもともとそこから来ている。それが１９４０年から今日まで続いたわけです。ですから、この母とこの兄の弔い合戦、母のご恩に対する恩返し、それが私の生涯で、どうしてもそれを成し遂げるまでは死ぬわけにはいかない。それなのに、躓いたり転んだり、しょうがない者です。

けれども、キリストは決して捨て給わない。遂にここまで来た。最後の仕上げに来てくださった。本当の無者にしてくださった。これは主観でも何でもない。それが、私が昨日から申し上げている、人生の最後の峠を乗り切りましたと言ったことなんです。私の目も本当に開いた。

●わがうちなるキリスト

生まれつきの足萎えをペテロは立たした。これも全くキリストの力によった。

「私自身の信仰でも敬虔でもないぞ」

と、ペテロははっきり言った。あのペテロの言葉は素晴らしい。

「キリストがなさったんだ。なぜ私を見るか」

と。その前には、ペテロは

「我を見よ」

と言った。

「わがうちなるキリストを見よ」

ということです。それで足萎えが立ってしまった。それで今度は、皆がペテロを神さまみたいに見ようとしたから、

「なぜ私を見るか。キリストだぞ」

と。これが本当の世界です。本当の信仰の現実はそれなんです。

「主は即ち御霊なり、主の御霊のある所には自由あり。」（コリント後３・17）

本当の自由は主の御霊のあるところにある。今の日本人の言っている自由なんてものは、もう可笑しくてしょうがない。我執にとらわれて勝手なことをやってるのが自由だと思っている。冗談じゃない。日本の教育はこんな事をしてたら成り立たん。どんなに制度を改革しようが、教育は制度ではない。教育者自身の問題です。本当にその点で身をもって証していただきたい。何も恐れることはない。

「我等は皆顔おおいなくして鏡に映るごとく、主の栄光を見、栄光より栄光にすすみ、

嬉しい言葉だね、「栄光」は「ドクサ」というギリシヤ語ですけれども、要するに光です。

主たる御霊によりて主と同じ像（かたち）に化するなり。」（コリント後３・18）

と言う。こういうパウロの言葉が、本当に直々（じかじか）にやって来ました。あなた方お一人一人が、その一人一人らしさを持って、キリストの栄光の姿に化する。みんな同類になるのではない。神さまは最大の芸術家ですから、一つも同じものを造らない。

落ちこぼれなんてものは一つもない。「落ちこぼれ」なんて、あんな言葉はとんでもない。皆、神さまの大事な器です。できるのできないのではない。人格というものは、そんなものではない。あなた方一人一人が天下一品である。人をうらやむ事も、けなす事も、何もない。お互いに尊重していくことだけ。教育者がそれだけの自覚を持って、一人一人を本当に見てるか。皆それらしさを持って、神の栄光を、キリストの栄光を現すように約束されている。我々の存在の使命はそこにある。証していく。キリストの証し人となる。こんな豊かな、楽しい人生があるかということになる。地獄みたいな惨憺たる世の中だけれど。

「神に帰れ、キリストに帰れ」

と、散々預言者も使徒たちも言っている。

「帰れ、帰れ。よそに行くな、帰れ、帰れ、帰れ」

と。この、

「主たる御霊によりて主と同じ姿に化するなり」

とは、やっぱりパウロは凄い。こういうことを言わされているんだから。どこを読んでも楽しい。「ああ、そうですか」ではない。

「その通りです、アーメン！」

と言えるようになる。だから、聖言は大事だと言っている。ただ「霊、霊」と言うな、言霊の世界だと――霊言でもどっちでもいい――聖霊と聖言は離すことができない。サタンは霊だから、「霊、霊」なんて言っていると、「こいつは聖言をいい加減にしている」と言って、サタンの方へ引っ張り込んでしまう。冗談じゃない。今度はそうかと思うと、観念信仰は、「これはどういう意味か？」と言葉の詮索ばかりやっている。御霊がない。要するに十字架が本当に受けとれてないから。十字架も観念、気安めになっている。

「我れキリストと共に十字架せられたり、もはや我れ生くるにあらず、キリストわが内にありて生き給うなり。」（ガラテヤ２・20）

とは、パウロの一番大切な告白です。

●キリストの変貌

マタイ伝17章をちょっと開いてください。

「六日の後、イエス、ペテロ、ヤコブ及びヤコブの兄弟ヨハネをひきつれ、人を避けて高き山に登りたもう。

カイザリア・ピリポから上の方へ行った所です。ヘルモン山が見える所です。

かくて彼らの前にてその状（さま）かわり、その顔は日のごとく輝き、その衣は光のごとく白くなりぬ。視よ、モーセとエリヤとイエスに語りつつ彼らに現る。ペテロ差出でてイエスに言う『主よ、我らの此処に居るは善し、御意ならば我ここに三つの廬（いおり）を造り…

なんて、ペテロらしいことを言った。

彼なお語りおるとき、視よ、光れる雲、かれらを覆（おお）う。

霊雲です。

また雲より声あり、曰く『これは我が愛（いつく）しむ子、わが悦ぶ者なり、汝ら之に聴け』

洗礼のヨハネによって水に浸って、キリストが上がって来た時に、聞こえた声がこれと同じものです。キリストは聖霊のバプテスマをあの時に同時に受けられた。

弟子たち之を聞きて倒れ伏し、懼（おそ）ること甚（はなは）だし。

三つの庵どころの騒ぎではない。

イエスその許にきたり之に触りて

触るというのは按手したんです。

『起きよ、懼るな』と言い給えば、彼ら目を挙げしに、イエス一人の他は誰も見えざりき。（マタイ17・1～6）

キリストの変貌は復活のキリストとして現れ給う、その予表です。

私は、キリストの変貌の、マタイ伝17章、マルコ伝9章、ルカ伝9章の、この変貌の記事が、こないだの自分の体験から本当にありがたくなって来た。私は聖人になったのではない。罪びとに過ぎません。けれども、私の内側は変貌させられてる。何者もこれを否むことができない。有り難うございます、主さま。

先程読んだところでも、あの盲人が9章の38節で、

「主よ、我は信ず」

と言って、彼の前に平伏したと書いてある。これが大事なんです。

「主さま、信じます、あなたを受けとります」

と言って平伏した。その時にこの盲人の心が開眼した。肉眼と霊眼が両方とも開いた。ただ肉眼が開いただけでは困る。それも大奇蹟だけれども、救いは魂の救いなんだ。それから肉体に及んで行く。

あのベティ・バックスターの話、私はあの本を読んで驚きました。しかし、驚いたけれども本当に嬉しかった。これこそキリストの証だと。これも生まれつきのくる病だ。どうにもならん。医者にかかろうが、薬を飲もうが、いくら教会に行こうが。けれども、お母さんと祈り続けた。キリストが現れて、

「お前は何年何月何日の午後3時に、私が治してあげるよ」

と、そうおっしゃった。その日を祈り待っていた。お母さんにもその事が示されている。祈り待っていたら、本当に午後3時にイエスさまが現れて、手を置き給うたら、バリバリと音がして、そのくる病が治って立ち上がったという。その写真まで出ている。各教会でこの事を証して、みんな本当に魂が入れ換えられたらしい。恵みの事実の証ほど強いものはない。キリストはこの世の終わりまで活きて働き給う。

●キリストの光で読む

ヨハネ伝の12章47節。さっき、「世を審かんため」という言葉があったけれども、反対の言葉があるといった。それがこれです。

「人たとい我が言をききて守らずとも、我は之を審かず。それわが来たりしは世を審かん為にあらず、世を救わん為なり。我を棄て、我が言を受けぬ者を審く者あり、わが語れる言こそ終の日に之を審くなれ。」（ヨハネ12・47～49）

いかにキリストの言をいい加減にしてはいかんか、ということが分かる。

「今、地上で私は審くのではない。みんな救おうと思ってやっている。でも、私の言った言が終りの日に審く」

「言」とはキリスト自身が言ですけれども。

我はおのれに由りて語れるにあらず、我を遣わし給いし父みずから我が言うべきこと、語るべきことを命じ給いし故なり。

「私の言に権威があるのは、遣わされたる神さまの言なんだぞ」

という。どこまでもキリストは神さまを立てている。無者なんです。キリストの権威は神の権威です。

黙示録を開いてください。黙示録21章23節。新天新地の新シオンという都は、

「都は日月の照らすを要せず、神の栄光これを照らし、羔羊（こひつじ）はその燈火（あかり）なり。」

（黙示録21・23）

という。

「神の栄光と羔羊だけが光っていて、日月がこれを照らすを要せずという世界だよ」

という。えらいことを示されているんだ、この黙示録というのは。私たちは電灯でもって本を読んでるけれども、聖書は電灯の光で読むのではない。キリストの光で読まなければ読めない本だということ。太陽の光でもいい。けれども、キリストの光でなければ読めない。私は阿蘇で最初に聖霊を受けた時に、帰りに汽車の中で聖書を開いたら、ベールが取れてしまっている。今まで何を読んでいたかと。これは聖霊の光で見るようになったからだ。十字架をただ仰いでばっかりいてはしょうがない。

こと聖霊のことになったら、

「聖霊に逆らったら、その罪は許されない」

とキリストが言われた。殉道の第一人者ステパノが、

「汝らは聖霊に逆らう」

と叫んだら、石で撃たれて殺された。でも、

「彼らを許してやってください」

と、キリストの十字架上の祈りをもって彼は祈った。彼は天界に行った。

これを聞いたのはパウロ自身である。パウロはいわば殺人犯を犯したんだ。おのが信仰の熱心というのは危ない。パウロはおのが信仰の熱心でやっていた、律法のように。ところが、その真剣さをキリストが買ってやったから、

「こいつをひっくり返してやろう」

と、キリストがパウロを見られたわけです。まぁ大変な方だね、キリストは。そのお膳立をしたのがステパノです。彼は命懸けでそのお膳立てをした。パウロを思えば、ステパノ

を決して忘れてはいかん。

黙示録に、

「**羔羊がその光である**」

とある。キリストがその光である。創世紀の

「**光あれ**」

が、黙示録に来たら、キリストの光となってしまった。栄光のキリストです。

私の詩では、最後は黙示録のところにくるけれども、これはとっても大変な詩になる。アウグスチヌスが終わりに非常に、「イルミナツィオーン」(Illumination) ということを言っている。イルミネーション、この光の事態、天国の最高のところです。しかもその光は恩寵の光である。イルミナツィオーンを別の言葉でいうと、「ルーメン・グラチエ」(Lumen gratiae) という。これはラテン語で、「恵みの光」ということ。聖書は、読んでいると、至るところに光という言葉がこんなにあるかと思うくらいです。

生まれつきの我々はみんな目あき盲なんだ。ところが、Aさんみたいに目がお見えにならなくても目あきである。まぁ、こんな人はちょっと日本に他にいないのではないですか。本当の現実では、

「既に癒されてあり」

という。これは、イザヤ書の35章が預言している通り。

「**盲人は目が開き、耳しいは耳が聞こえ、足萎えは立ち**」

と書いてある。それを現実になさったのがイエス・キリストなんです。天国を現じながら歩いておられた。このイエスに本当にしがみつけば、イエスの中に自分を投身(なげみ)すれば、人の思いに過ぐることが起きる。癒される癒されないではない。キリストの事実が起きると言った方がいい。これは行きます。あのベティ・バックスターのように行きます。

●詩「盲人の証言」

それでは、新讃歌『盲人の証言』を歌いましょう。

A50　盲人の証言　（１９８８年８月４日作　歌調　讃美歌530「浮世のなげきも」）

1　生れながらなる　盲人(めしい)に出遭い
弟子どもは訊(き)けり　「誰(た)が罪なるぞ」
キリストは言へり　「親にも子にも
その責めあらんや　聖業(みわざ)のためぞ」

2　主は地に唾(つばき)し　泥を濡(ぬ)らして
これを彼れの眼に　塗(ぬ)りて命じぬ
「シロアムの池に　往きて洗えよ」
彼れかくせしかば　眼は開(ひら)きたり！

3　界隈の者ら　いとあやしみて
とやかく噂し　彼れに問い寄る
盲人の証言　唯だ一つなり
「イエスという人　わが眼を開けぬ！」
4　主のこの聖業は　安息日に
起きしことなれば　パリサイ人ら
律法を盾にし　イエスと彼れを
殺めんと謀る　何たることぞ
5　イエスは言い給う　「我れ審かんと
この世に来れり　目あきは霊盲
盲人は目あきの　逆転なるぞ」
み神の栄光　ここに現はる
6　われらも各々　み霊の光
全身に浴びて　救はれしかば
主なるキリストの　僕婢
生涯をかけてぞ　証人たらん

天光記之

●著作集第十巻12月3日「自由の霊」

読みたいところがある。二つ読みます。これは著作集第十巻に私が書いた文章です。

12月3日「自由の霊」

「主は即ち御霊なり、主のみ霊のある所には自由あり。我らは皆面覆を除かれて鏡に映る如く主の栄光を見、主のみ霊によって、栄光より栄光へと進み、主と同じ相に化するなり。」（コリント後書3・17～18）

パウロはこの第三章で、我らは「活ける神の御霊で録されたキリストの手紙〔エピストレー〕」（3・3）だといっている。正に文字通りの活字なのである。だから本当に地上をみ霊の自由に在って生きるなら、その生活そのものが不立文字で天界に記されている。人がどう思うこう思うではない。人の毀誉褒貶如何にもあれ、「キリストの手紙」とならんことのみ。

また彼は

「儀文は殺し、霊は活かす」（3・6）

といっているように、聖書も書かれたグラマであるが、聖書は聖霊で書かれた書だから、聖霊の光と生命と愛で読まなかったらパウロの言う、「儀文〔グラマ〕」にしてしまう。読んで力が来るのでなければ霊の書として読んでいないことになり、所謂「聖書研究会」的な読み方ではダメである。聖書をよむことが直ちに力となり、愛であるような身読が大切。

聖書は眼で聴き、体で受けとる書だ。

右掲の聖句は全くすばらしい。聖霊は天的自由を与える。空を飛ぶ鳥には道がないが、あれが自由の道である。「われは道なり」と言ったイエスは正にこの自由の道であった。キリストの中に全身で祈り入るとキリストの光を浴びる。実は鏡に映る以上に主の栄光に目がくらむ。光に貫かれて栄光化されてゆく。その人はその人らしくして、本質に於てキリストの相に化せられてゆく。

●著作集第十巻 11月25日「神より出で神に帰る」

11月25日「神より出で神に帰る」

「噫、神の智慧（ソフィア）と知識（グノーシス）とはいかに豊かにして深い哉！　その審判（さばき）は測り難く、その諸々の道は尋ね難し。誰か主の心を知りし、誰かその相談相手となりしや。それすべてのものは神より出で、神によりて成り、神に帰するなれ。栄光永遠に神にあれ！」（ロマ11・33）

中世の偉大な神秘思想家エックハルトも言った。「神が理解できたらそれは神ではない」と。神学に組織神学という部門がある。神の真理はしかし組織化して可いものか。アクィナス、カルバァン、バルト、ブルンナーの如き偉大な神学者たちはこの部門に属する。彼らの神学上の業績に勿論心から敬意は表する。しかし、アウグスティヌス、エックハルト、ルター、キエルケゴール、スウェーデンボルク、ベルジャエフの類いの神学は組織（ジュステム）ではなく告白的神学である。神学が神の啓示の書たる聖書を基とする限り、啓示神学であり、告白神学であるのが神学の本質であろう。パウロはその諸書翰を以ておのづから生まの神学を展開している。矛盾の要素、劇的な構成、有機体的（オルガーニッシュ）な構造をもっている。神の鴻大な生ける真理（真法、霊法）に圧倒されているのだ。右掲の如き感嘆の言を吐露しているわけである。預言者たちは波状的に吹き寄せる神の啓示の言を伝えると、それは自（おのず）から詩になった。特にイザヤ書は驚くべきものだ。

私の如き小さな魂も神・キリストに圧倒されているので、聖霊の力と智慧で告白したら『無の神学』（著作集第三巻）となった。無即無量という性格である。天界の預言者や使徒を相手にしているのでそのうちに愚生からも詩泉が湧いて流れるであろう。

はい、どうも失礼しました。では、祈ります。